雪彦山植物採集記

岩谷成彦

昨年大塩でノジギクの採集会のあつた時、北村先生が雪彦山に行きたいともらされたのが、今度の採集会の行われた機縁となつた。

しかし北村先生は、室井先生が昭和7年雪彦山で採られたアリセマの標本を見て、珍らしい、或は新種ではなかろうかと、疑問をもたれてから十年この方、一度現地へ行つて見たいとの希望をもつて居られたのだから、十数年の思がかなうかどうかという重大な意義をもつ採集会であつた。

そもそも雪彦山とは洞ケ岳・鉾立山三辻山の三峯の総称であるが、世間では麓の鳥居前より北を望んだ時天を衝いて峙つて見えるピラミッド型の峯、洞ケ岳のみを指している。洞ケ岳は更に不行岳・第三峯・地蔵ケ岳・大天井ケ岳に分れている。昔は「播磨の大峯」と呼ばれ修験者の行場であつたが、近年は日本百景の一として、又ロック・クライミングの練習場として訪れる人も少くない。比較的近年迄大森林におおわれていた爲、植物の種類も多かつたので播磨地方の植物研究者も殆ど一度は訪れている。しかし植物の種類や分布については発表されたものが少く、わずかに兵庫縣博物學会会誌三号に記載されている田代先生指導の植物採集会の記録（西本俊夫氏）及び播磨植物目録によつてその片鱗をうかがい知るに過ぎない。姫路から約七里であるが、山之内迄バスが通つている。其処より約一里歩けば麓の賀野神社の鳥居前に着く。これより右の坂を登れば約八町で賀野神社へ、左夢前川に沿うて行けば登山道にさしかかる。神秘な感じの山だ。

昭和二十四年五月二十八日姫路駅西出口に集合。参加人員四十余名。豫定より少しおくれて午後三時二十五分トラックに乗り出発。五時今晩の宿舎賀野神社社務所前に到着。目前雪彦山（洞ケ岳）が迫る様に聳えている。門を入ると慶長六年、時の姫路城主池田輝政公が來山した時植えたといわれる榊の大木がある。その黒い幹に植えつけてあるセキコクが我々を歡迎するかの様に咲き誇つてゐる。薄暗く茂つた中に輝くばかりの白い花は甚だ印象的だ。

サンマータイムの有難さで、五時迄とはいえまだまだ日は高いので附近の採集に出掛ける。五時四十五分ウラジロウツギ咲く夢前川に沿つて少し登ると、杉の造林地帶に入る。橋の手前で田川先生よりイワヘゴその他あたりに生えてているシダ類についてお話を聞くあたりには、コンテリウツギ・シヤガ・ミヤマヨメナ・マンリヨウ・フタリシズカ・ヤナギゴケ・オオキジノオシダ・トウゴクシダ・マンネングサ・ハカタシダ等があつた。

橋を渡るとそれより上はすつかり木を伐つている。伐採跡の急斜面にはミカエリソウが一面に生えているこれは陰樹だからこのあたりの木が茂つていた時はもつと沢山生えていたであろう。現在の様に木を伐つてしまつてはもう絶滅する一方であろうとの事である。そこの岩のあたりにはノコギリシダ・ヤマヤブソテツ・シケシダ・イノデモドキ・イノデ・ジユウモンジンダ・マメヅタ・サジラン・ツヤナシイノデ・キヨタキシダ・イヌチヤセンシダ等のシダ類やアオホラゴケ・チヨウチンゴケ・ホウオウゴケ・ケガンゴケ等コケ類も多いが同じ運命をたどるのであろう。反対側の河原には、ミヤマヨメナが咲いているが岩の上のは発育不良でシユンジユギクとも見える。途中オオバアサガラの大木があつた。イワヒバ・ベンケイソウ・イズセンリヨウ・リンボク・ヨロイグサ等も見えた。木馬道よりそれて横の谷に入る。道は狭く傾斜が急なのに人数が多いので、なかなか前進しない。少しでも廣い処があると先生方を中心にかたまつてしまう。その爲じつとしていてもあたりの植物が分る。木を伐つてしまつているが割合に種類は豊富だカラスザンショウ・ヒメレンゲ・ケンポナシ・ヒサカキ・ジヤケツイバラ・アブラチヤン・ウリノキ・ヨシノアザミ・マタタビ・コウゾ・エビガライチゴ・カナムグラ・イワガネセンマイ・リヨウメンシダ・ケチヤンバギク・ゴンズイ・ヒメユズリハ・ガクウツギ・ナベナ・アオガシ・ムラサキシキブ・チジミザサ・ビナンカヅラ・カヤ・イボタノキ等が見られる。北村先生よりこのあたりにあるオニノゲシやその他キク科植物についてお話を聞く。又少し登つた処で誰かが持つて來たヤマトテンナンショウの佛焔苞や肉穗花序の先端の特徴について、詳しいお話があつた。先生が探しておられるアリセマはどんなのであろうか？同時にその根を食べられた時の辛辣な辛さ等の体験談や、あたりのサワギク等についてお話があつた。そろそろ暗くなつたので宿舎に戻る。直ちに野册にはさむもの、胴乱を整理するもの、名前の分らぬのを聞くもの等あはたゞしく日が暮れてゆく。

夕食後全員一室に集る。北村先生が皮切りに「牡丹と芍薬」について話をされる。つづいて川崎先生御持参の白井光太郎博士の不老長生薬の文獻を中心に、い

ろいろな質問や体驗談が飛び出し話はそれからそれへと花が咲いて夜の更けるのも忘れていたが明日も採集があるので殘念ながら切り上げて十時頃床についた。

二十九日、心配していたが幸今日も晴天だ。準備に手間どつている間に元氣な生徒達は先に出発してしまつた。七時半社務所を出て昨日の木馬道を少し登り橋の手前から左へ折れて登り始めた。とたんに大きな岩にぶつつかり驚かされる。杉林の中をジグザクと登る道が急なので息苦しい。カラスザンショウ・ツクバネウツギ・シロバナウンセンツツジ・アクシバ・ウスノキ・アセビ・スノキ・イヌガヤ・ウラジロノキ・イタヤカエデ・ヒメユズリハ・タニタデ・ハクウンボク・ウスギヨウラク等をとりつつ少し登る。ヒカゲツツジがあらわれて來た。道が急なので高さははかどる。林がつきて伐採跡へ出る。右側の木一つもない谷のむこうに、木と絶壁でつくられた大天井不行岳が嚴然と聳えている。左は急斜面になつて、はるか下の我々の泊つた坂根の部落につゞいている。隨分高く登つたものだ。振り返つて見ると夢前川の谷をへだてゝ賀野神社の屋根が見える。お宮の廻りだけ木が茂つている。一休みしているうちにおくれていた人々も揃つたので再び登りはじめたこれからが大変だつた。木を伐つたまゝ道に轉がしてあるのだから道がさつぱりわからない通り易すそうな処を選び又轉んでいる木から木へ傳つたり、その下をくぐつたり難行苦行して登る。とても採集どころではないやつと其処を通過して林の中に入り少し進むとこれは驚いた。道は岩がごろごろした廣場になつている。右側は大きな岩がおおいかぶさる樣になつていて今にもくずれ落ちそうだ。出雲岩だというのだそうだ。こゝで全員揃うのを待つことにする。時に八時五十五分。胴乱をおろしホツと息をつく。ウシコロシの花盛りだ。ふと見上げると大きな蜂の巣が岩にぶら下つている。休憩中北村先生が「故田代先生の採集日記を発表しようと思い今整理中だが、その中に雪彦山は峻しい山だと書いてあるので覚悟はして來たが、成程ひどい山だ、今迄はとても採集どころではなかつた。しかしこれから頂上迄はゆつくり見て行きましよう」等いろいろな話をされてゐる中に遅れていた人もぽつぽつと着く。熱心な人はあたりの植物を採つて來る。コバンノキ・ヒナウチワカエデ・ダンコウバイ・コマユミ・イワガラミ等々誰かがツタウルシを持つて來た時、それにかぶれた時の治療法として川崎先生が秘傳を公開された。即ちアブラゲを熱く燒いてその熱いうちにかぶれた処をたんねんにこする。そうして後でそれを食べておけばよい。

再び登りはじめる。フカゲナンキンナナカマドが咲いている。途中少し外れて出雲岩の上へ出る。左の岩の上のギボウシは葉柄に赤い斑点があつて面白い。持つて帰つて植える爲とらうとしたが高くて採れない。上から廻つて採ろうとタイナクグリとでも呼ばれそうな岩と岩との細長い隙間を通り上へ出た。辷り落ちたら大変と木につかまりながら大騒ぎしてやつと採る。右側は木が茂つているが左側はすつかり木を伐つている。併しどちらも急な斜面で道は、馬の背の樣な尾根につゞいてゐる。ベニドウダンが上へ登る程美しくなる樣に思える。道は急だし岩は多くて登りにくい、イワガサ・チゴユリ・オオバニガナ・イワタケ・リヨウブ・ヤマツツジが見られる。十時二十五分遂に頂上に着く、既に大分登つて居た。イワカガミの花を持つて我々を迎へる。頂上北東に咲いてゐた。

晴れてはいるが山や谷はぼんやりと霞んでいる。高峻なだけに眺望もいゝ。大きく開けた南方向つて左に群山より抜きん出て見えるのはナツアサドリの東限地といわれる神崎郡の七種山だ。じつと右に同じように突出しているのは明神山、それらの山々の遙か向うは播磨灘で家島が夢のように浮んでいる。足の下は絶壁をなし、その下に坂根の部落がある。東方木の間がくれに聳えているのは、京都の愛宕山より笠の形に見えるという笠形山全くどちらを向いても山又山の波だ。そこで記念写眞を撮り出発しつたのが十一時頃だつた。

尾根つたいに北行、天豹岩の横を通る。左側は木の無い急斜面だが、右側は何という立派な森林だろう。いよいよ待望のアリセマを探す爲、地藏ケ岳への道をどらず、更に北の方へと尾根を傳つて進む。併し目印のシヤクナゲの大木がないので、これより散開して谷の方へ下り、アリセマを探すことにする。さあ誰が採るか。ツガの林に入ると長年月に積つた枯葉落葉でぶかぶかして氣持が悪い。又石の露出している処は崩れ易い。急斜面なので用心して下りて行く。誰かが「危い」と呼ぶ。ガラガラと石の落ちる音がする。皆一せいに止つて落ちてゆく方をみる。その瞬間千古の靜寂がやぶられた。

目的のアリセマは遂に見出された。発見の第一番はやはり室井先生だつた。ヤマトナンテンショウと違いこれまでマムシグサと云われていた方に似ている。「変つでいる。新種だ」とつぶやきながら、それをじつと見ていられる北村先生の嬉しそうな顔、それにしても此処は何という立派な林だろうツガスギ其の他の木々でつくる天井は日光も通さない。その爲か下草は非常に少い。処々ツルが垂れている、眞黒で炭化したかのように見えるのはオオクマヤナギ。その他ゴトウヅル等藤本もよく発育している。この暗い林の中に窓の樣に明るいのはイヌシデ等の落葉樹の新緑だ、瑞々しい其の色が美しい。落石に氣を付けながら急な斜面

それも下へ行くにつれて水の爲岩は辷り易くなつている爲皆ちりぢりばらばらになつてしまう、やつと谷に下りとホツとする。しかしとうとう問題のアリセスは見付けられず殘念だ。下の方には大きなヤマトテンナンシヨウがあつた。谷を下り皆が一処に会した時、室井先生はアリセスを四本も採つておられた。北村先生は大喜びで、生のうちにと写生をはじめられた。

大天井岳より虹の滝に下りるコース中少しそれると地藏ケ岳だ。そこではヒメコマツ・コメツガ・イワカガミ等が見られる。それより眺望のすばらしい事、どんな期待をもつて行つても決して失望することはないであらう。次回雪彦山へ登る機会があれば是非一度は地藏ケ岳の頂上に立たれるようお奬めする。

さてぐるつと廻つて虹の滝の谷間に下り、こゝで晝食をとる。十二時二十分であつた。途中チャルメルソウ・タニタデ・ウワバミソウ・ツルミヤマシキミ・ケオオバクロモジ・サワルリソウ等が見える。

十三時十分谷をさかのぼつて木材運搬用のローブウエイの出発点に出る。この途中北村先生の採られたアリセマは後日のお便りによるとアオヅツテンナンシヨウ（青筒天南星）と命名された新種との事であつた。この附近の川の底は一枚岩になつていて癒醒の床といわれている。対岸の岩にエンレイソウ・ツクバネ・イワタバコが生えている。少し上手の河原のヤブデマリは花盛りだ。杉の木のすくすくと伸びた下で、北村先生より甘茶について、田川先生よりオシダ・サカゲイノデ等附近のシダ類についてお話を聞く。あたりにはツヤナシイノデ・サイゴクイノデ・ハクモウイノデ・ヤマイヌワラビ・シケシダ・ミゾシダ・ミヤコイヌワラビ・モミジガサ・ヤマアジサイ・クワガタソウ・ミズタビラコ等がある。

こゝより少し行けば夢前川の源流といわれる水船（欧穴）がある。今回は割愛して帰途に着く。社務所迄は木馬道一本だ。右側晝食を食べた谷を埋める新緑の美しい事、此処は紅葉谷といゝ山中の一名勝である少し曲ると道は谷より離れるが、新緑の林はまだつゞく。雪が積つた様に花が咲いているのはミズキであろうか。トチノキも花盛りだ。その美しい立派な林もやがて盡きて伐採地となる。ここより見た洞ケ岳は一入立派である。下り道はどんどんはかどつて二時五十五分社務所につく。途中ゴマジオノキ・キジヨラン・キクバヤマボクチ・ヤブミヨウガ・コバノガマズミ・オトコヨウゾメ・ヤマジノホトトギス・エビヅル・コンテリギ・ツリフネソウ・ウリハダカエデが見られた。

午後四時トラツクに乘り雪彦山に名残を惜しみながら帰途につく。聞けばこの山にも時代の嵐は強く吹き幾百年を經た大木も一瞬に倒されてゆくとのこと、惜しいものだ。若し來年あたり來たら、すつかり山の様子も変つているかも知れない。そうなると Arisaema seppikoense Kitamura 等のあつた事は昔話りとなつてしまうのだろう。この貴重なそして立派な森林を全部とはいわないから、一部でも手を入れないで今のまゝにしておいて欲しいものであるとは二日間の採集で一杯になつた胴乱をかかえながらの車中談。全く雪彦山こそ春のツツジ秋の紅葉と探れば探る程興味深い植物の宝庫である。

末筆ながら今日の採集会に御指導をいただいた北村、田川両先生をはじめ諸先生方、宿舎その他種々親切に御世話をいたゞいた柏尾氏に誌上より厚く御礼申上げ拙い筆をおく次第であります。

郷土の生物　第一集

兵庫縣生物学会編　神戸新聞社発行

内容の大要

明石の旧象、縣下で発見された動植物、陸の貝、丹波栗、コウヤマキ、プランクトン、郷土の切花、寒天とテングサ、柳行季、兎和野原のレンゲツツジ、丹波の黒豆、廣田神社境内のツツジ。

B6判、112ページ　定價 50円　送料6円

生物を愛し生物を親しむことは、われらの生活を豊にし、科学的慰度と能力を養う源泉であります。本学会ではこの使命を痛感し、ここに「郷土の生物」を刊行し、生徒の研究心喚起に寄與せんとする次第であります。生徒諸君は勿論、父兄及び教師諸彦の御愛読を切望します。

申込所、希望の方は、送料を添えて、神戸市長田区寺池町1丁目、縣立兵庫高校、岡村はた宛に願います。

氷上の自然　第一集

氷上郡教員組合文化部編

内容

氷上の植物、郡内で食べているキノコ、郡内の淡水魚、郡内の初夏の鳥、土を調べよう、郡内の氣候的地位について、氷上の氣候

B6判　112ページ　定價32円　送料6円

郡内の本会員の永年に亘る努力の結晶によつて氷上の自然界が親切丁寧に面白く書かれている。特に郡教員組合文化部長であり、本会の理事、細見末男氏の努力に負う処が多い。

云う迄もなく新らしい教育が地域社会に既に行れなければならぬ今日、縣下否、全國でトツプを切つて新教育の歩み方を示されたものである、單に郡内居住者のみでなく、カリキユラムに大童になつている現在、理科教育にたづさわる諸氏の好伴侶であると信じ御すゝめしたい。

申込所、希望の方は送料を添えて氷上郡生郷村、生郷中学、細見末男宛に願います。